

# 南筑平野東部八女地区の地理学的考察

## — 農業を中心として —

松 延 三津子

調査地域は、筑後平野の東南部に位置する八女市である。肥沃な土壌と、農業に適した気候という自然的条件、農業開発の先進地としての歴史的優位性、農業と結びつき農民の分解をくいとめながら集約的な農業を支えてきた家内工業としての伝来産業（久留米餅・木蠟業・堤灯・仏壇製造業・筑後和紙・竹細工・製茶業・その他）、そうした環境の中に、八女市の農業は育った。しかし、八女市農業も又日本農業の一環である。農業をとりまく環境の変化は、この地域の農業をも大きく変遷させてきたし、今後も大いに変化しようとしている。戦後の伝来産業の衰退によって、狭い耕地（一戸当耕地面積61a）を充分に利用した農業経営が進んだ。特に昭和25年以降より、米・麦を中心に茶・果樹・電照菊・野菜・鶏・乳牛・等全農家の30%以上が三種目以上の作目を取り入れている。この様な多彩な作目から、最近特に注目をあびるようになった電照菊栽培の状況を、全国四大主産地となっていた形成過程とともに重点をおいて考察を行い、これに土地利用と兼業化の変遷、地形と農業土地利用との関係をからませた。そして論文内容を次の様な構成とした。

一章 地域の概観（①位置 ②人口 ③自然条件 ④水利慣行）

二章 土地利用と兼業化の変遷（①～江戸中期 ②～明治 ③～明治末期 ④～昭和初期 ⑤～昭和21年 ⑥戦後～）

三章 農業地帯区分（①東部山間山麓地帯 ②西北部丘陵及び周辺地帯 ③山の井用水東部地帯 ④中の井用水地帯 ⑤花宗用水地帯）

四章 電照菊栽培の主産地形成過程とその動向（①産地形成に至る過程 ②現在の栽培状況 ③産地形成の要因 ④農家経営 ⑤問題点と将来の展望）

五章 要約

八女の電照菊は、立地の要因とされている冬期温暖性、大都市への近接性という二条件に、他産地（渥美・小豆島・兵庫）より劣りつつも、大産地を形成している。それには、社会的条件が大きな影響を与えた。八女の電照菊栽培は、栽培地域が扇状地上にあることからくる水田の落差及び砂土・砂壤土が作った良好な排水条件、共同意識の高いこと（①同一栽培基準による栽培 ②共同選花・出荷 ③ブール計算）、遠隔地にあるにもかかわらず他産地より勝れた輸送条件（関東・関西方面への行き荷のトラック利用）を立地要因としている。特に輸送条件は、地理的位置の有利性に反して、この地域が遠郊輸送園芸農業として成立する主要因となった。現在、日本農業の立遅れが叫ばれているが、この立遅れより立直ろうとする動きが各地にみられる。この電照菊栽培もその一つの現われである。農業地域としてのこの地域が、久留米・福岡市の影響を受けて、若い労働力の流出等の都市化の現象が起っている。

その対策として、農業構造改善事業を始めとして、自然条件を考慮しての主産地形成の方向を打ちだすなど、積極的な動きをみせているが、今後どのように変化していくか興味あるものである。

## 麓集落入来郷の 歴史地理学的考察

森山 芙美子

外城制度、郷土制度によって特徴づけられた島津藩の封建的支配形態の結果、形成された麓集落は、旧薩摩藩領に百余も存在し、中世的分割知行を存続させられた兵農未分離の武士が地方の隅々にまで居住し、軍事面、行政面、生産面の各機能を果していた。その麓集落の特殊性は、この地域の地理的隔絶性と相まって他の地域とは異なった政治的・社会的意義をもたらし、特殊な集落景観と形作ると共に、今に至るまで日本の中であって辺境地的性格を持続させ、様々の問題を投げかけている。これらの問題点の指摘と解明を志し又、これらの集落が現在を示している背景としての歴史にも重点を置き考察を試みた。この論文の主眼点は次の3つに集約できる。

1. 中心集落以外の在にも多くの武士が配置され、屯田地を形成し、麓的形態をなし、各面に大きな役割をはたしていたので、在をも含めた広範囲の「郷」でとらえようとした。
2. 従来地理学で触れられてこなかった門割制度にも注意を向け、郷土の生産活動の状況と比較しながら麓及び在の経済基盤としての農業を明らかにする。
3. 麓の明治以降の変遷にも目をむけて、麓の崩壊する側面と、なおかつ残存する封建要素のため発展をさまたげられている保守的側面とが地域に及ぼす過程をとらえようとした。

一章は麓集落の一般的性格とし、今までに解明されてきたことを示し、軍事面からみた外城の性格をはっきりさせるために地図上にその分布を示した。又郷における大ざっぱな状況を示した。

二章では入来を具体的に考察することになり、麓集落が形成されてゆく過程を考察し、これまでの研究されてきたことを1つ1つ確認しかつより具体的に示したつもりである。

三章は明治以降の変遷を私なりに考えてきたつもりである。明治を迎えた郷が、行政単位としては相変わらず一つの同区域を持ち、その行政機能も士族出身者で独占されたが、経済的側面からの変容は非常に著しい。半農半士だった郷土は明治維新によって必然的に農業従事者として位置づけられ、地租改正を第1の契機とした商品経済の浸透によって、まず農業内部での変化を段階的に生じせしめた。ところが日本産業の発展に伴って、もはやそれは農業内部では対応出来えず、又、士族層が子弟への教育中心主義に傾き出してからはそれまで農業政策の積極的推進者だった彼らに替って担わる者もなく、零細なまま農業が停滞し、出かせぎ離村による人口流出が急速に促進されてくる。教育を受けた士族層も都市に留まり、その成果を積極的に還元して地方文化の発展に寄与すべく態度もみられぬ。よって辺境地たる鹿児島島の低位生産力地帯としての形成が出来上るわけであるし、特権区域としての麓も宅地の売却により